

「こんにちは。お元気そうで」

「はい。郁も少しふっくらしました」

「よかった。たくさん食べられてるんですね」

郁とこの施設を出て三か月。まだ肋骨は見えているけれど、おやつではなく食事で体型が戻ってきたのだから順調と言えるだろう。睦実も理事長も、嬉しそうに表情を緩めて郁を見ている。

「まあ最近ほ。ただ最初はやはり胃が痛んだよう」

それなりに食べられるようになったからと施設を出たものの、たくさん食べようとしていたり、油っぽいものを食べたりするとすぐに体調を崩した。胃の痛み、下痢。でも郁はそれでもたくさん食べようとした。最初は体調不良を予期できないのか、もしくは今までの分を取り返すように食べたくてたまらないのかと思っていたけれど、一瞬見せた苦しそうな表情で、郁がたくさん食べたときに梅沢が褒めてしまったせいだと気付き、それからは皿に盛るのを少量にして、完食したことを褒めるようにした。すると徐々に食べたいものだけおかわりをねだるようになり、食後にぐったりすることはなくなっていた。可哀想なことをしたけれど、おかげで食事の好みも知ることができた——そう言うと、二人はほっと息を吐いて表情を緩めた。

「体重も五キロ増えたんです。」

「五キロ！ すごい！ 郁くん、よかったねえ。表情も顔色もぐっと明るくなりましたね」

睦実が膝をついて郁に視線を合わせた。久しぶりに会ったのでもしかしたら梅沢の背後に隠れてしまうかもしれない——しかし、郁は睦実の手に顔を寄せた。スンスンと匂いを嗅いで、確認をしている。

「覚えてるかなあ……一緒にシャワー浴びたりもしたよね」

「わふっ」

どうやら覚えていたらしい。匂いで記憶しているのか、安心を得るために嗅いでいるだけなのかは分からないけれど、郁が警戒しなかったことで睦実の顔にも安堵の色が見えた。

「郁くん、私は先生たちとお話をするから、少しだけ待っていてくれるかな」

「わふっ」

まるで「分かったよ」とでも言うかのように吠えると、郁はカバンの中に顔を突っ込んだ。そうやって河童のぬいぐるみを啜えて取り出し、きよろきよろと辺りを見る。

「郁くん、今日は睦実先生ではなく他の職員さんに遊んでもらおうか」

今度こそ警戒するかと思っただけれど、睦実が入室させた職員に、郁はすんなりと河童を差し出した。きつと、元は人懐こい子なのだ。人間が好きで、遊んでもらうのが大好きな子。

「初めまして、郁くん。よろしくね」

どうやら部屋の端のプレイスペースで遊んでくれるらしい。理事長たちと相對するソファ

の左側。郁からすれば梅沢と理事長たちのどちらの顔も見られるし、梅沢からも振り返ることなく郁を見ることが出来る。安心できる配置がありがたかった。

職員と郁がそちらに向かったのを見て、改めて二人に向き直る。

「すみません」

忙しい三人の時間をもらうことへの謝罪と、気配りへの感謝の気持ち。しかし理事長と睦実はとんでもないと首を振った。

「僕たちも郁くんの元気な顔が見られてとても嬉しいです。順調そうですね」

そう言った睦実は話しながら郁の方を見た。本心から喜んでくれているのがよく分かる。

「ええ。たまに悪戯をするようになったんですが、それさえも気を引こうとしているのかと思うと嬉しくて。やはり叱るべきでしょうか」

もしここで「しっかりと叱らないと郁のためにならない」と言われても、叱れる気はしなかった。最近では郁の保護者としての立場も意識するようになったけれど、やはり可愛くて、心から愛しているのだから捨てるようなことはない——そう信じられるのは梅沢だけで、

やはり郁はまだ不安なのだろう。いつでも梅沢の顔を伺い、それを基準に行動していた。それでもあくびをする姿なんかはリラックスの表れのように見えたし、甘えたいときの仕草なんかも分かるようになってきた。だから悪戯さえも愛おしい。

「恐らくその悪戯はお試し行動だと思います。悪いことをしても梅沢さんが郁くんを嫌いにしないかの確認なので、郁くんや梅沢さんに危険のない悪戯なら……抱きしめながら優しく論じてあげてほしいです」

お試し行動……聞いたことのある言葉だ。しかし、郁が可愛すぎて全く思い至らなかった。

普通は試されるなんて不快なはずなのに、郁が相手だと思いと嬉しく思う。安心で満たすどころか、溢れさせてやりたい。

「きつと今のままで大丈夫だと思えますが……急に叱るようになると、甘やかされてきた分、不安や恐怖も大きくなります。なので今のうちから優しく論ずということはしておいて、梅沢さんのストレスを溜めないようにしてください」

「ストレス……？」

そんな風を感じたことなど一度もなかった。しかし、この関係が年単位になったらやはり心境も変わってくるのだろうか。

「……今は、幸せと楽しみでいっぱいでも恐らく想像もつかないと思います」

そう言ったのは、睦実の話を静かに聞いていた理事長だった。

「でも人間同士……恋人同士でも倦怠期があったり、夫婦になると自然と会話が減ったりということはよくあることでしょう。しかし犬……犬や、犬プレイを好むような子にはそれが理解できません。犬はずっと飼い主が好きで、飽きるということがないんです。人間同士なら『そういう頃合いかな』と理解することができても、犬にはできない。だから不安になっってしまうんです」

「そうですか……」

郁に視線をやると、すぐに目が合った。いつからこちらを見ていたのだろうか不安になる。

見ているのに気付いてもらえない——それはとても寂しいはずだ。今すぐにも抱きしめて安心させてやりたかった。

「郁くん、おいで」

小さな声で呼んだのに、郁は飛び出すように梅沢に向かって走ってきた。あまり急ぐと膝や手首を痛めてしまう……それでも呼んですぐに来てくれるのが嬉しい。

「おいで」

身体を抱え上げ、膝の上にのせる。視線を合わせて頭や頬を撫でていると、甘えるように頬をすり寄せてきた。

「ふふ……可愛い。郁くんは梅沢さんが大好きだね」

「わふっ」

大好き、という言葉を受け入れるようになったのも最近の話だ。以前は「大好き」と言う度に悲しそうな顔をしていた。きつと、大好きと言っていた飼い主に捨てられたことで心に傷ができていたのだろう……そう思い、一時はその言葉を使うのをやめたけれど、どうしても一度人間を信じてほしくて。たくさんのハグとともに「大好き」を繰り返したところ、こうして嬉しそうな顔をしてくれるようになった。

「郁くん、河童はどうした？」

「わふっ」

大急ぎで来たからだろう。河童はまだ、プレイスペースに置かれたままだった。

「もう少し遊んでいてくれるかな」

「わふっ」

本当にいいこだと思う。それに素直だ。生まれたときから犬として育てているせい、か、意地悪やずる、打算というものが一切ない。

膝から下ろし、もう一度頭を撫でる。

「わふっ」

郁がプレイスペースに戻るのを見送り、居ずまいを正してから理事長と睦実の頭を下げた。

「失礼しました」

「いえ、むしろ安心しました。人間同士だとどうしても相手に気を遣って身内を後回しにしてしまいがちですが、ここでそれは不要です。一番に郁のことを考えていてください」

理事長の言葉に、隣で睦実も頷いた。

「郁くん、本当に嬉しそうですし、ほら、今の触れ合いでもう安心したみたいですよ」

睦実の視線を追って郁を見ても、もう視線はぶつからなかった。職員の間かす河童を楽しくそうに追いかけている。

「ありがとうございます」

「それで……今日は？」

「はい。実は……郁を一度人間に戻すべきか悩んでおりました」

それは身勝手な理由からだ。けれど、それはとてもじゃないが口にするにはできない。

「……そうですね。僕個人としても、人間として生きる選択肢もあると郁くんには知ってほしいと思います。でも、もちろんどちらを選ぶか……どちらも選ぶかは郁くん次第ですし」
そこで睦実は言葉を切った。俯き、何かを考えている。しばらくそうした後、顔を上げると先を続けた。

「……でも、もし郁くんが人間としてだけで生きる道を選んでも、梅沢さんは郁くんを愛し続けることができますか？ 今から人間としての振る舞いや言葉を覚え、二足歩行ができるように練習し、最終的に社会復帰を果たすまでには相当な時間がかかります。人間関係や、人間としての思考を学ぶにもたくさんさんの時間や経験が必要になります。一生かけて少しずつ、ということにしなければなりません。それでも——」

睦実は思うところがたくさんあるようだった。一気に話し、再びつらそうな顔で言葉を切った。ぎゅつと、膝の上で拳を作っている。

「……梅沢さん、ここは犬の保護施設です。うちに登録をしていた以上、梅沢さんは犬を希望されていたと分かっています。でももし郁が人間としての生活を選んだとき、梅沢さんの郁に対する感情が変わってしまうのなら、このままでもいいと私は思っています」

「楓馬さん……！」

睦実が、信じられないといった顔で理事長を見上げた。しかし、理事長は視線を返さない。じつと梅沢から視線を逸らすことなく続ける。

「郁はとても幸せそうに見えます。ですから、人間として生きるかどうかというのは『今すでに百ある幸せ』が増えるか減るかという違いだけなのではないでしょうか。むしろ、人間には悩みも多い。郁が人間として生きることを望んだとしても、それが必ず幸せに繋がるとは思えません。それなら、今の百パーセントのままの幸せでもいいのではと思うんです」
どうやら理事長と睦実は考え方が違うらしい。でもどちらも郁を想ったの言葉だということと痛いほどによく分かった。

「大事なのは郁の幸せですが、そのためには梅沢さんの愛情が変わらないことが必要不可欠です。もし少しでも、人間としての郁を受け入れることに不安があるのなら、このまま生きていくべきです」

睦実は何も言わなかった。じつと真剣な顔で考え込んでいる。何を考えているのか——睦実の考えが気になった。

「……睦実先生はどう思いますか」

「え……あ……僕は……」

さつきまでは言いたいことをはっきりと言葉にしていたのに。上の立場である理事長の言葉を否定することができないのか——いや、そういうわけでもない気がする。しかし話そうとしないのに無理強いをすることはできない。

「……私は、郁を愛しています。最初は可愛らしい犬だと思いました。でもこうして生活をしているうちに、郁にもっと甘えてほしい、名前を呼んでほしいと思うようになりました。でも、それは私の身勝手な願望です」

本当は、それ以上の願望も抱いていた。一度人間としての感情を学び、その上で愛してい

ると言っただけだ。飼主とペットとしての愛情だけではなく、恋愛感情も持つてほしいと——やはりここでそれを口にするにはできないけれど。

~~~~~

——純粋な郁に、よこしまな感情を持つようになったのはいつだったのだろうか。最初に会ったときはただ漠然と可愛いと思うだけだった。それこそ本当に、捨てられて心に傷を負った弱々しさが可愛かった。けれど、一緒に生活をしていくなかで、愛情を求める必死さと、時折見せる全てを諦めたような表情が色っぽくて。いつでも可愛く子供のように笑っていてほしいと思いつつ、この子は性感を覚えたらどのような表情をするのだろうと考えるようになった。

そしてその劣情を自覚したら、もうあつという間だった。当然性的欲求だけでなく、郁からの同様の感情も求めた。言葉も通じない相手に恋愛感情を抱くなんて——そう思ったものの、その態度と行動が可愛くて、言葉なんて関係ないと思えたのだ。でもただ、好きと言っただけで満足してほしくて。けれど音で「好き」と発せられるだけじゃなく、きちんと感情を伴った「好き」が欲しかった。そう思ったら——やはり郁には一度人間になつてもらおうしかなかった。

(勝手だ……)

やはり人間は勝手だ。生まれてすぐお金のために親に売られ、そこでは商品になるために犬として育てられ、好奇心なのか趣味なのか金持ちに買われ、そして捨てられた。続いて里親として現れた梅沢には劣情を持たれ、挙句同じ感情を返してほしいからと人間に戻されようとしている。

(……最低だ)

やはり、このままの方がいいのかもしれない。郁は成長期にまともな栄養を与えられていなかったからか、今のところ精通していると分かる兆しはない。性をいじる様子もないし、そもそも性器の存在を意識している素振りすらない。朝オムツを開いても、勃起や夢精をしていたことだって一度もなかった。

——それなら、このまま。

少なくとも、人間同士の付き合いのように別れがやってくることはないのだ。梅沢が捨てない限り、郁はずっとここに居る。ここにいる、梅沢からの愛情を求め続ける。それで十分なのではないか——でも、苦しかった。郁が寝付いた後にひっそりとベッドを抜け出し、トイレで大急ぎで射精を済ませまたベッドに戻る日々。ペニスを刺激している間、浮かんでるのは郁の姿……けれど、性的な雰囲気や一度も感じたことがないせいで、上手く想像することができなくて。でも……それでも郁しか浮かばなかった。過去の相手などもう顔も覚えていないし、携帯でそういったものを漁る気にもならなくて。

ただとにかく、郁がいい。郁しかいない。

(郁くん……)

「わうっ！ わうっ」

「ああ……」

まるで、どうしたの？　とても言っているかのようにだった。考え込んでしまっていた梅沢の意識を取り戻すように、顔をペロペロと舐めてくる。

「……可愛い」

この舌が、ペニスを舐めたらどれほど興奮するだろうか——つい、そんなことを考えてしまう。郁は性感なんて知らないのだから、感じさせるような動きはしないだろう。ただこうして顔を舐めたり、梅沢の手から食べ物を食べたりするときのように淡々と舐める。その想像が、また更なる劣情を煽っていく。

(まずいな……)

昨夜も抜いたというのに、ペニスが反応を始めてしまった。密着しているわけではないし、勃起自体意識されることがないのだから気付かれることはないだろうが——でもただ、苦しい。

「わふっ」

遊んで、かまって、撫でて——郁の目がおねだりをしていた。梅沢とて触れたい——身体中に。結局真性で剥けないままのペニスにキスだつてしてやりたいし、擦ったときの快感だつて教えてやりたい。でも、頭のどこかでは獣姦という言葉もちらついていた。郁は人間だと分かっているのに、中身が本当に犬でしかないから。だから、何も知らない郁に手を出せば獣姦のように思えた。それに……何も知らないからこそ子供に手を出すような罪悪感。実年齢は分かっているけれど、恐らく成人は過ぎていると分かっているのに、それでも本当に子供のようで。

「わんっ」

「ああ、すまない」

わん、と吠えるときは少しだけ怒っていたり、拗ねていたりするときだ。あまりにも梅沢の意識が郁に向かないので機嫌を損ねたのだろう。

「郁くん、可愛い。郁くん……愛してる」

胸に引き寄せるように頭を抱きしめてから一度身体を離し、顔を見せて頭を撫でる……その繰り返し。すると、郁はちゃんと機嫌を直してご機嫌な声で吠えてくれた。

「わふっ！」

くくく

「はうっ……」

「たくさん出したね。亀頭が精液で白くなってる」

「わふっ」

「ほら、搾るよ。大人しくして」

後ろから残滓を搾ってもらおうとすつきりした。動悸も治まり、ほっと息を吐く。それからころりと仰向けに倒れて陰部を曝し、ペニスを清めた後にオムツをあててもらおう。

「ハウッ」

すごく気持ち良かった。それにオムツも、いったばかりで敏感なペニスを守ってもらっているようでほっとする。でも、たくさん甘えたからか久しぶりに抱いてほしくなってしまうた。

(むずむずする……)

犬でいたい気持ちと抱かれたい気持ち。でも犬でいる間は欲情してはもらえない。

「よし、いいよ。じゃあ片付けてくるから」

いいこでステイだよ、という言葉に一吠えして布団に潜る。ごそごそと手を使わずに入ると、楓馬が笑った音が聞こえた。人間のときなら恥ずかしいと思うのに、今はただ笑ってもらえたことが嬉しい。でも楓馬はもう洗面所に行ってしまっただろう。そう思うと寂しいけれど、ここにいたらちゃんと戻って来てくれるから。

(うう……)

したい。してほしい。ペニスはまだ疲れているのに、アナルが疼く。久しぶりに楓馬の大きなペニスで中をたくさん突いてほしい。そして楓馬が感じている顔を見せてほしい。元々顔立ちがすごく整っていてかっこいいのに、セックス中の顔はその何倍もかっこよくなるのだ。特にイク直前。激しい腰の動きも、何かに耐えるように顰められた眉も、熱い吐息も、睦実を見つめるまなざしも――。

(っ……)

楓馬の視線を思い出したら恥ずかしくなってしまうた。だって感じ入っている楓馬の視線を知っているということは、楓馬も当然感じている睦実の顔を知っているということ――。

(や……)

恥ずかしい。だって、すごくいやらしい顔をしているはずだ。気持ちよくて、快感と楓馬のこと以外何も考えられなくなつて、そしてすぐに頭の中が真っ白になって、普通なら決して口にできないようないやらしい言葉だつてたくさん発してしまっている。

「おまたせ……おーい」

くすくすという軽い笑い声が聞こえる。

「出ておいで。可愛いお顔を見せて」

そのまま布団の中にいたかった。けれど、大好きな楓馬に呼ばれているのに無視はできない。のそりと目までを出すと、楓馬は優しい顔で笑っていた。

「睦実だね。可愛い」

「っ……」

どうしてバレたのだろう。目までしか見えていないはずなのに。

「なんで……」

「ん？ 照れてるからすぐに分かるよ。それにむうはメス犬との交尾を見られても恥ずかしかるどころかどこか誇らしげだからね」

「うそっ！」

そんな風に見えていたなんて、と焦って顔を出すと、楓馬がにやりと口角を上げた。

「冗談だよ。むうも睦実も控えめだよ」

「うう……騙された……」

「ごめんね」

これは多分、拗ねてもいいところだ。けれど、さっと伸びてきた手に頬を撫でられ、至近距離で見つめられればもう逃げることはできない。

「ふう、ま……さ、」

「睦実、もつと顔を見せて」

「や……」

「ダメだよ。射精したばかりの可愛い顔が見たい」

「っ……」

えつちな声。交尾には興奮しないはずなのに。

「楓馬さん……？」

返事はなかった。ただ無言のまま顔が近付いてきて、唇を塞がれて。目を閉じて身を委ねたけれど、でも唇を食まれるだけで離れた。

(え……?)

もつとたくさんしてくれると思ったのに。唇を舐めて、噛んで、舌を入れて絡ませてくれると。

「……物足りないって顔してる」

「っ……!!」

一気に顔が熱くなった。その熱は全身に広がり、一気に汗をかく。

「熱いな」

「んっ……汗……」

「オムツの中が蒸れてしまうよ」

「っ……あ……」

なんだか今の楓馬は意地悪だ。どうしたのだろう。この程度で不安になることはないけれど、どうしたら良いのか分からなくなる。

「楓馬さん……？」

「久しぶりに散歩もしたし、疲れただろう。ゆっくりお休み」

「あ……やだ……」

「睦実？」

「あの……その……お尻、が……」

むずむずするんです、と小さな声で言うと楓馬が笑った。

「むずむずするのか。うんちかな」

「ちがつっ！」

「じゃあ、どうしたら治る？ 睦実がづらい思いをするのは俺も本意じゃない。俺は何をしてあげられるのかな」

わざとだ。わざと意地悪を言っているのだ。

「やだ……意地悪やだぁ……」

子供のように甘えて言えば、「さつき種付けを終えたばかりなのにね」と意地悪く笑われた。でもその通り。まるで発情期だ。

「うう……」

「睦実のお尻のむずむずはどうしたら治るのかな」

「……楓馬さんに抱いてほしい……」

恥ずかしいおねだり。でも楓馬は今度、優しく笑った。

「あつん、んっ、ふぁっ」

後背位で、両乳首を揉まれながらの律動。大好きなところを突いてもらえて頭が真っ白になるぐらい気持ちがいいのに、性感に直結するペニスだけは弄ってもらえずに苦しみが増していく。

ペニスには、お漏らしをしてもいいようにと尿パッドが巻きつけられていた。その上にはペニスカバーと呼ばれるペニスだけを包む袋状のものをそつと優しく、まるで宝物を包み込むような手つきで装着され、動いても尿パッドが落ちないようにと、カバーから伸びた紐を腰のところでしっかりと結ばれた。その一連の行為がすごく恥ずかしくて、とてもえっちなでもそれがあるせいでペニスを扱ってもらうことができなくて、苦しかった。

もつとたくさん気持ち良くなりたいたい。アナルだけじゃ物足りない。ペニスを握って扱ってほしい。さつき交尾をしたばかりだけど、自分で動くより楓馬の手でもらった方が何倍も気持ちいいから。

なのにおねだりしても、弄ってもらえるのは乳首だけ。確かに乳首も気持ちいいけれど、それではペニスのむずむずは治らない。

「あつ、あつん、あんっ」

気持ちいい。でも苦しい。

「もうやだぁ」

「何がいや？」

「むずむずするっ」

「ちゃんと入ってるよ」

違う、そつちじゃない、と駄々をこねる子供のように首を振る。

「じゃあどこ？」

優しい訊き方だった。けれど、分かっているくせに訊くのは意地悪だ。でも、そんな意地悪も好き。

「前……」

「前？ ほら、してるよ」

「ひぁっ！」

そう言っただけで楓馬が力を入れたのは乳首をつまむ指先だった。意地悪が長い。普段なら、意地悪を長く続けるなんてしないのに。

(やっぱり郁くんにかかりつきりだったのをひきずってる……？ それとも人間に戻ったこと？ 親の迎えを待っていること？ それとも……それとも……)

嫌われる要素はいくらでもあった。楓馬は気にしていないふりをしてくれていたけれど、本当は嫌だったのかもしれない。でも感情的になると睦実が怖がると思って、こうして小出しにして発散している――。

「ごめんなさいっ」

「睦実？」

「ごめんなさいい……」

「睦実、」

ペニスが抜かれ、くるりと仰向けにされた。目の前に心配そうな楓馬の顔がある。

「睦実、」

「楓馬さん……これからはちゃんとするから……だから嫌いにならないでっ……」

意地悪も好き。けれど、それが楓馬を傷付けたり、追い詰めたりしたことによるものなら嫌だった。怒らないでほしい。嫌いにならないでほしい。捨てないでほしい。捨てられるのが怖い。捨てないで――。

「悪かった。つい可愛くて」

大丈夫だよ、と楓馬は強く抱きしめてくれた。

「睦実、愛してる。怖がらなくていい。大丈夫、怒ってもないし、嫌いになったりもしないよ」

「……ほんと……?」

「本当。――ほら、欲しかったのはここだろう?」

そう言って楓馬はペニスカバーの上からペニスを握った。

「っあ!」

突然の刺激。落ち込んだ心に突然の刺激を与えられ、混乱する。

「愛してる……可愛いよ。お漏らしで汚さないように尿パッド巻かれて……その上からおちんちん揉まれてすごくエッチな顔になってる」

「あっ、あっ!」

~~~~~

(喉乾いた……)

まだ窓の外も暗い時間、ふと目が覚めた。喉がカラカラだ。隣を見ると、梅沢サンは目を閉じたままだった。

(寝てる……)

そつと身体を起こしてみると、郁が丸まっていた場所には梅沢サンの腕が伸びていた。きつと、敷いてしまっていた。痛くなかっただろうか。でもそうやってぎゅつとしてもらいながら眠ると安心できるのだ。あまり悲しい夢や怖い夢を見ないし、見たとしてもすぐに梅沢

サンが気付いてくれるから。「大丈夫だよ、夢だよ。もう怖いのは終わったよ」そう言ってた
くさんキスをしてくれるから。

(起きない……)

郁が起きると、いつも梅沢サンも起きるのに。でもそれだけ疲れているのかもしれない。

本当は起きてほしい。郁が起きたことに気付いてほしい。でも、もう郁のお世話には疲れたよ

——そう言われるのが怖くて、静かにベッドから降りた。

(お水……)

普段梅沢サンはずっと一緒にいてくれるので、お水や餌が置きっぱなしになっているとい
うことはない。けれど寝るときだけは念のためと言って置いておいてくれるのだ。そつと寝
室を出てダイニングに向かう。郁が通ると、床からすぐのところに設置されたライトがパッ
と灯った。

(ふふ……)

これも、郁のために梅沢サンが設置してくれたものだ。

夜中に目が覚めたときは梅沢サンを起こしていいと言われている。でもお水を飲むくらい
は自分だけで平気。そう思っていることに気付いた梅沢サンは、それならと言ってこれをつ
けてくれたのだ。だからこれは、梅沢サンの優しさの光。そう思うとじつと見ていたくなっ
てしまうけれど、喉も渴いたし早く梅沢サンの腕の中に戻りたい。

(前はそんなのなかったのにな……)

寝るのはずつと床だった。ベッドに上がることは禁止されていたし、与えられていたのも
ブランケット一枚。でも、それが普通だと思っていた。むしろご主人様のところに行くまで
の場所はずつと寒くて硬いところだったから、ご主人様のおうちに行けたことはとてもラッ
キーだと思っていたのだ。でも、梅沢サンはもつとすごかった。ベッドに上がっていいし、
一緒に寝ようねと毎晩一緒にベッドに入ってくれる。ベッドに上がった郁が身体を丸めて横
になると、肩までしつかりと布団を掛けて「寒くないかな」と訊いてくれる。それが嬉しく
て顔を舐めると、梅沢サンも嬉しそうに笑ってくれるのだ。あんまり嬉しいと勝手におしつ
こが出て身体がぶるつと震えるのだけれど、それを寒いと勘違いした梅沢サンは郁の身体を
温めようともつと強く抱きしめてくれる。本当はおしつこだよと思うけれど、ぎゅうが嬉し
いから寒かったことにして身体をすり寄せてみたり。もしかしたら梅沢サンは本当のことに
気付いているかもしれないけれど、たくさんたくさん甘えさせてくれた。

(梅沢サン……)

考えたら、もう会いたくなってしまう。ご主人様のようにたまにしか会えないというわ
けでもないのに、ほんの少し離れただけですごく寂しくなってしまう。

大急ぎで水を飲み、それから寝室に戻ろうと身体の向きを変えたときだった。突然、寝室
の方から「郁！」という大きな声が聞こえた。

(っ……!!)

声は梅沢サンのものだ。でも今まで「郁」と呼ばれたことはない。ずっと名前を間違えて
いたけれど、いつの間に正しい名前を覚えたのだろうか。

「郁！ 郁！」

バタバタという足音が聞え、梅沢サンの声も一層大きくなった。あれは、怒っているときの声だ。だって、小さいときに住んでいたところも、ご主人様も、怒るときは大きな声を出した。顔を真っ赤にして、手を振り上げて――。

——怖い。

(どうしようっ！)

きつと、勝手にベッドを抜け出したことを怒っているのだ。夜中に目が覚めたら起こすようにと言われていたのに、そうしなかったから。

(ごめんなさいっ)

きちんと謝らないといけない。そう分かっているのに、優しい梅沢サンに怒られるのは怖かった。だって、今まで一度も怒られたことがない。ダメだと分かりつつ悪戯をしたときも、梅沢サンはにこにこ笑ってくれていたから。

「郁っ！」

(怖いっ！)

梅沢サンが怒るなんて——どうしよう、でも謝らなきゃと頭では思いながら、身体は勝手にダイニングの椅子の下に潜り込んだ。

~~~~~

その日の夜中、眠っていると腕の中の郁がやけに動くことに気が付いた。

「……郁くん？」

「わう……」

「どうした……どこか痛いのかな」

額に触れても熱はない。先日、郁がいないことに焦って大声を出してしまったことでベッドから降りられなくなってしまうたのかもしれない、と焦る。

「喉が渴いたかな。一緒にお水を飲みに行こうか」

しかし、郁は返事をしなかった。もし提案にのっていれば、嬉しそうに吠えたはずだ。

「……違うのかな。お腹が痛い？」

こんなとき、焦りと心配でつい「どうして話せないんだ」と思ってしまう。もちろん郁が悪いわけではないと分かっているけれど、気持ちを分かかってやれないことがどうにもつらくて。

「頭かな。頭が痛い？」

お腹、頭……と順に触れ、「ここかな」と一箇所ずつ確認をしていく。けれど頭もお腹も無反応。まさかと焦って胸に触れたけれど、どうやらそれも違うようだった。

「手……足？」

じつと梅沢を見つめていることから、どこかが痛いのだということとはもう分かっている。

郁はただひたすら、梅沢が該当する箇所に触れるのを待っているのだ。

「……まさか」

オムツに触れると、郁が「わうう……」と力なく鳴いた。

「ごめんね、オムツを開くよ」

綿棒で洗ってしまったせいだろうか。郁が嫌がらなかったので平気なのだろうと思い初回にもかかわらず時間をかけて洗ってしまった。

（やりすぎたか……）

大慌てでオムツを開こうとしたとき、そこでようやく室内が暗いことに気が付いた。常夜灯だけでは細部まで見ることはできない。

（焦り過ぎだ……）

落ち着かなくて。でも場合によっては病院に連れて行かなくてはならない……そう思うと恐怖もあった。そのような事態になっていない……でも、もしそうなっていたら、郁は耐えられるだろうか。抱っこのまま診察を受ければ……それとも痛みに呻く郁をなだめ、朝一番に施設に行つて常駐医に診てもらう方がいいのだろうか。でもすでに施設を出た郁を診てくれるだろうか——。頭の中ではそんな思考や不安がぐるぐると渦巻いていた。けれど、郁に動揺を覚られてはいけない。普段痛むことのないそこが痛むなんて、きつと郁は何も分からず不安でいっぱいだろうに。

「電気をつけて、お部屋の中を明るくするよ。おめめがびっくりしちゃうから、お布団でかくれんぼをしようか」

反応はない。しかしゆつくりと待っている余裕はなく、目に掛からないよう、そつと顔の周りに毛布を寄せて影を作った。そしてリモコンで電気を明るくしてオムツを開くと——郁のペニスが勃起していた。

「郁くん……」

初めて見た郁の勃起。もしかして、亀頭の洗浄がトリガーとなって反応をしたのだろうか。

「痛い……？ それともむずむず変な感じがするのかな……」

質問をするときは郁が答える間を作つてやらないといけないのに……分かりながらも意識がペニスから離れず、つい、じつと見つめてしまった。

「……わう……」

「あ、ああ……ごめんね、痛い？」

無言。

「むずむず……変な感じがする？」

「わう……」

どうやら痛みではなく、勃起の違和感が気になるだけのようだった。確かに赤く腫れているようなこともない。そのことに安堵し、オムツを開いたまま抱きしめる。

「これはね、郁くんが大人になったっていう証拠なんだよ」

反応はない。やはり分からないのか。

「男の子はみんな大きくなると、こういう風になるんだ」

しかしそれ以上のことをどう説明したら良いのか分からなかった。もし郁の意識が犬では

なく人間の子供だったなら、年齢次第では子作りに必要なことであると伝えただろう。しかし、郁は恐らく子作り……交尾についても知らないはずだ。

「……むずむず治そうか」

「わう」

郁の表情は「助けて」と言っているように見えた。しかし、治すためには刺激しなければならぬ。このまま治まるのを待ってもいいけれど、せつかく勃起できたのだから快感も教えてやりたい。

(言い訳だろうか……)

郁に触れたい、郁が感じているところが見たい、そう思っているから治まるのを待とうと言えないのだろうか。射精させた方が早いとか、せつかくだからとか、それが本当に郁を思っていることなのか、自分でももうよく分からなかった。

(本当にいいのか……)

「わうっ」

行動に移せずにいると吠えられた。早くして、と言っているのだろう。

「……少し怖いかもしれない。でも痛いことはないし、大人だったらみんなすることだからね」

郁の顔を胸に抱え込むようにして、ペニスを握ったのは、顔を見たらもう止まれないと思っただからだ。初めての性感に戸惑いながらも感じている顔は見たい。でも見たら……きつと暴走して傷付けてしまう。

「わううっ」

「郁くん？」

まだペニスを握っただけ。なのに、不安そうな声。

「どうしたかな。痛い？」

抱き寄せる腕から力を抜くと、郁はほっとした顔で梅沢を見上げてきた。痛いかという問いに返事はないので、恐らく不安だったのだろう。

「……顔、見ながらする？」

「わう……」

寝るときと同じだった。密着できるかどうかより顔が見えるかどうか。郁はしっかりと腕に抱かれるよりも顔が見える方を好む。不安の表れなのだろう。でもそんなところも愛おしかった。

「分かったよ。怖くないからね」

「わう……」

しっかりと視線を合わせながらペニスを握り直す。それだけでピクリと揺れる顔も、ぎゅつと瞑られる目も愛おしい。

(まずいな……)

自制できるだろうか。でも、しなくてはならない。

「大丈夫……ほら……」

「わうっ?!」

ゆっくりと上下に動かすと、郁は目を見開き身体を引いた。

「大丈夫だよ」

ペニスは萎えていなかった。郁に声を掛け、時折額にキスをしながらゆっくりと手を動かす。もし自分だったら、こんな風に刺激されたらじれったくて苦しいだろう……そう思うほど緩やかな刺激でも、郁は瞳を潤ませた。恐怖と快感への戸惑いだろうか。不安げに揺れる瞳がいじらしい。

「これはね、気持ちいいことなんだよ」

数回の瞬き。息が荒くなることもなく、静かな空間。性的なことをしているなんて全く思えないほどしんと静まり返っている。

「気持ちいいんだよ」

秒針の音すらしらない部屋で、梅沢の声が響く。覚えてごらん……まるでそうやって郁を性に導こうとしているように思えた。しているのは自分なのに、やけに客観的に感じられるのはどうしてだろう。

「わう……」

性感を得られているのだろうか。それともまだ違和感しか覚えていないのか――。

「怖いことではないし、痛くもないから。ゆっくり息をして、おしっこをするところに意識を向けてごらん」

少し言い方が難しくなってしまった。けれど他に言いようが浮かばなかった。それに、梅沢のペニスも限界だった。初めての性感に戸惑う表情がこれほど劣情をかき立てると思ってもみなかった。

「はう……」

「郁くん……」

少しずつ戸惑いが落ちてきたのか、郁の頬が赤くなってきた。感じている。郁が、あの可愛い郁が梅沢にペニスを扱かれ快感を拾っている。

「わふ……っふ……」

「……気持ちいいね……」

伏せられた睫。軽く開いたままの唇。そこから漏れる音は、喘ぎ声ではなかった。それでも気持ち良さそうなのが伝わってくる。

「可愛い……少し速くするよ。おしっこが出るような感覚があっても、我慢せずにそのまま出すんだよ」

ちら、と瞼が上がり、茶色い瞳が梅沢を見た。欲に濡れた目。でもまだ不安も見え隠れしていた。

「大丈夫……一緒にいるから。それにほら、郁くんのおしっこするところに触れているのは私だよ」

視線を郁の目からペニスに落とす。小さいそれが一所懸命大きくなった姿にぞくりとした。

(ああ……)

いやらしい。まるで子供なのに。郁の体型も、性格も、ペニスの見た目も。なのに、まるで大人のように感じている。

「わふ……」

「うん、それでいい……」

嬌声が上がらないのは男だからなのか、それとも嬌声を知らないからなのか——恐らく後者だ。人間は、その存在を知っているから嬌声を上げるのだ。感じていたらこう反応する、と分かっているから。そうでなければ外国と日本で嬌声が違うはずがない。

「わふ……」

「うん、ゆつくりイってみようか」

手は速める。けれど、話しかける声はゆつくり。激しい快感も教えてやりたいけれど、今郁を気持ち良くしているのは梅沢なのだを意識してほしくて。

「ああ、びくびくしてきた。イきそうかな」

イクの意味も理解できないのに、郁は今射精しようとしているのだ。この行為の意味も分からないまま、ただ飼い主として認識している梅沢に身を任せている。

（ああ……）

ペニスが苦しい。今すぐ抜き、射精してしまいたい。郁が感じている姿を見ながら、一緒に精液を吐き出してしまいたい。

「わふ——っ……!」

郁がぎゅつと目を瞑った。肩が竦んだのは怯えによるものだろう。自分の身に何が起ころうのかも分からないまま、頭が真っ白になるような絶頂を感じる……きつと、とてつもなく怖いだろう。でも郁は耐えた。恐怖に耐え、射精をした。

~~~~~

「わふうっ」

「ああ……いやらしい音がしてきたよ。郁くん、可愛いよ」

ちゅこちゅこと鳴るペニスを刺激し続けていると、ふと郁が上体を起こした。咄嗟に手を離し梅沢自身も上体を起こす。

「郁くん？ どうした？ 痛かったかな」

「わふう」

しかし郁はベッドの上で四つん這いになると梅沢の股間に顔を近付けた。

「郁くん!」

「わふう!」

そしてぐりぐりと鼻先を押し付けてきた。これでもう、完全に勃起がバレてしまった。

「郁くん、どうしたんだ」

ダメだよ、と言いたかった。けれど郁から行動を起こすのは珍しく、言葉で否定してはいけないような気がして、慌てて顔と股間の間に手を入れた。

「郁くん、どうしたかな。何か気になるのかな」

「わふっ」

見上げてくる郁の目は純粹で、汚れないままだった。この行為がいやらしいこと、なんて考えはなく、単純に梅沢の陰部が気になるからしているというだけのような。

「わふうっ」

手で止めても、郁はぐりぐりと顔を押し付け仕草をやめなかった。しまいにはズボンを下ろそうと噛んで引っ張ってくる。

「郁くん……」

もしかして、自分と同じかどうか確認がしたいのかもしれない、と思い当たった。この好奇心や疑問を持つ気持ちも成長の一つと思うと無下にもできず、かといって郁に欲情した陰部を見せるのもいかなものかとも思う。

「わう……」

悲しそうな鳴き声。拒否されたと思ってしまったのだろうか。

「……分かったよ。郁くん」

(……本当にいいのか……)

返事をしたくせに、まだ脱いでしまっているのか決められなかった。今なら適当な理由をつけて流してしまうことができるはずだ。けれど郁はどう思うだろうか。せっかくした意思表示を拒否されたと思ったら、もう二度と自分の意思で動いてはくれないかもしれない。せめて、と思い、ズボンと下着をずらしてペニスを出すだけに留めた。すると、郁はさまざまそこに飛びついた。

「郁くんっ！」

「っ！」

つい出してしまった大声に、郁の身体が大きく揺れた。

「ああ、すまない。驚かせてしまったね。私も驚いてしまった。大丈夫、怒っていないよ。

大丈夫だ」

丸まる背中を抱きしめていると、ゆっくりと郁が顔を上げた。

「郁くん、怖い思いをさせてしまったね。でも怒っていないから、大丈夫だよ」

「わう……」

まだ元気がない様子。けれど、額にキスをするときだけで安心したのか首筋に鼻先を擦りつけてきた。

「すまなかった。大丈夫、愛してる。怖くないよ。大好きだ」

「わふ……」

どうやら安心できたらしい郁は、梅沢の首筋から顔を離れた。そしてもう一度、出したままの陰部に顔を埋める。

(まずい……)

郁の顔が、ペニスのすぐ近くにある。きつと欲の匂いはもう感じ取っていることだろう。

「郁くん、あー……その、」

「わふっ！」
「う……！！」

再び出そうになった大声は、舌を噛むことで咄嗟に耐えた。けれど、まさか郁がペニスを舐めるなんて。

約5万5千文字です。

梅沢×郁

精通・射精介助・兜合わせ・射精のおねだり等

楓馬×睦実

犬プレイ・木への放尿・散歩・腰振り疑似交尾オナ・尿パッドを装着しながらのセックス等

ハピエン。

捨て犬保護施設はこれにて完結です。

よろしくお願いいたします！

捨て犬保護施設 ーサンプルー

goneone (ーわんわん)

2020/11/18

メール: goneonegoneone@gmail.com

pixiv: 19591291

Twitter: @goneone11

LINE: goneone

